参考資料１

アドバイザーの主な意見

スポーツの持つ価値･魅力

・各施策をうまく関連させ、県・コミュニティー・人・健康・街などにスポーツがどう役に立つのかを打ち出していくことが、これからのスポーツの創造につながる。

子どものスポーツ（部活動の地域への移行）

・部活動の地域移行は、新たな取り組みにより子どものスポーツ環境をより良くするチャンスと捉えることができる。
・コーディネーターは、地元に人脈があり組織マネジメントができる人材が必要。
・学校教育は重要であるが、学校だけでなく社会教育で子どもを育てる視点も大切。
・部活動の地域移行に対しては、不足している何かにスポーツが持つ支え合いの要素等をどう役に立たせるかが重要。
・部活動の地域移行は、基礎自治体のスポーツ環境の充実がねらい。
・小さくても良いので、こういうものがあったらよいという事例をつくる。
・子ども不在の議論になってはいけない。

地域スポーツハブ

・地域スポーツハブのこれまでの成果を次の展開にどのように結びつけるのかを考える必要がある。

ボランティア

・スポーツを通じて新たなつながりや学びを得て、よりよく暮らす、「Well being」という考え方があり、ボランティアとして参加して他者とつながりを持つことで、社会に役立つことを実感できるようにすることは重要。

スポーツ推進委員について

・スポーツ推進委員の活動を魅力化する取組を進めることが必要。

女性のスポーツ参加

・既存の取組の中で女性にスポットをあてたり、県が行う事業の中で活躍している女性に協力を求めることを行うとよいのではないか。

障害者スポーツ

・障害者スポーツはスポーツ担当部署だけでなく、生活面を支援する福祉部署等の複数にまたがるので、スポーツを始めるに当たって用具購入の補助など、既存の各種補助制度の一覧があればよい。これを一般の方が調べるのは困難だと思う。

世界の動きについて

・「スポーツ」という言葉を使うと垣根が高くなる場合がる、ある国では日頃のすべての身体活動量を進めるという考え方で運動の実践を進めている。(レクリエーション的な活動の推進)

施設整備

・施設整備は、スポーツ傷害の予防という観点からも重要。特に急速な気候変動による熱中症等に対して施設面から対策をとることも求められる。

競技団体のつながり

・各競技団体が自らの競技とは異なる他のスポーツ団体と連携することは、競技力向上のうえで重要。

スポーツツーリズム

・アウター施策が中心となっており、市町村にとって自分たちにはできないと感じてしまわないように、インナー施策も組み込むことが望ましい。
・都会に住む者からすると高知県には素晴らしい自然の資源がたくさんある。これらをもっと活用することができる。高知県の強みだと思う。

スポーツサミット

・高校生や大学生の集まりに県として協力する中で、テーマを持ち込んで議論をしてもらうこともできると思う。(部活動の地域移行についてもおもしろいアイデアがあるかもしれない)

スポーツコミッション

・スポーツコミッションと県をはじめとする関係機関や団体の繋がりを深める意味でも、互いの現状と課題を共有する機会を継続して持つことも重要。

評価

・取組の評価をする際に結果の評価は大事だが、県の資源をどのくらい使用しようとしたか、他の関係者の知見をどのように利用したかといった「プロセス評価」も重要ではないか。

今後の施策の視点

・これからは、ダイバーシティ＆インクルージョン（Ｄ＆Ｉ）という考え方から、エクイティを含んだＤＥ＆Ｉという考え方が重要視されてくる。

※ダイバーシティ（Diversity）
　年齢、性別、民族、宗教、疾病、性自認、性的指向、教育、国籍等の違いを尊重すること。
※インクルージョン（Inclusion）
　どのような個人や集団であっても、歓迎され、尊重され、支援され、評価され、参加できるような環境を作ること。
※エクイティ（Equity）
　公平性とは、情報、機会、リソースへのアクセスを、すべての人に公平な扱いを保証しようとするもの。

地域スポーツ推進部会の主な意見

スポーツ指導者

・学校現場で生徒と向き合う教員には、子どもの体のことについて理解をして欲しい。また、ある種暴言とも捉えられる言葉を生徒にかけていることもあり、指導者には子どもに対する言葉の大切さを学んで欲しい。こうしたことの積み重ねが運動をすることの楽しさを感じることに繋がっていくと思う。
・指導者が計画の中にある研修を受ければ、スポーツから暴力を根絶できるかどうかには疑問がある。有資格者の中にも指導面で課題がある方がいる。

安心・安全なスポーツ活動

・競技によっては子ども達がオーバーワークになっている部分もあるので、子ども達の体に配慮して交流の促進をして欲しい。
・スポーツドクターによる治療に加えて、競技への復帰計画についても具体的な方法を教えて欲しいと感じる。怪我をした後のアフターフォローの充実をして欲しい。
・暴力・暴言の根絶という観点では、日本サッカー協会では子ども達やプレーヤーの安心と安全を守る担当者として、「ウェルフェアオフィサー」を各大会に配置する取組を行っている。現地でアドバイスできる人をつくる仕組みも必要。

スポーツを支える人材

・県の人口が減り、子どもの数も減る環境の中では、第二の人生を歩んでいる高齢者にボランティアになってもらうための取り組みが必要だと考える。スポーツに少子化の観点をしっかりと入れて考える必要がある。

部活動の地域移行

・地域移行された活動（クラブ）の全国中学校体育大会への参加については、競技によって対応が異なる部分があるため、今後どのようになるのか注視する必要がある。

女性のスポーツ参加

・競技をする女性の人口が少ないと捉えている。子育て世代が昔よりも子どもに寄り添うことが多くなってきているので、親子でできるスポーツ環境づくりが大事だと思う。
・県出身者で他国の代表監督や海外で活動している人達がいるので、県内だけでなく県外・国外で活躍する女性選手の紹介もして欲しい。

リモートの活用

・リモート機器を活用した取組の参加者の増加だけでなく、ライブ配信（例：高知ユナイテッドの試合）を視聴している人数などにも関心を向けてはどうか。

スポーツ推進委員

・スポーツ推進委員としては、地域住民の健康づくりを考えながら引き続き活動の充実を図ることが必要。

障害者スポーツ

・障害者スポーツの大会誘致について、実際に競技をみることは障害者スポーツへの理解につながるので、情報の発信をしっかり行ってもらいたい。

スポーツツーリズム

・アマチュアスポーツの誘致について、Ｗｅｂサイトを活用したプロモーションも大事であるが、関係性が深い地域やターゲット圏域へ足を運び、現地でプロモーションすることも大事。
・次期計画の中に「教育旅行」の誘致という視点も加えて欲しい。

人材の確保

・人材の確保に関しては、雇用の面も含めて高知県に愛着を持ってもらえるような活動や高知県ならではのものを作って行く必要がある。

競技力向上部会の主な意見

競技団体における選手の育成

・国体の結果を見るとスポーツ医科学の活用が成績につながってきていると感じる。
・競技団体の中でスポーツ科学センター（ＳＳＣ）を活用してない団体へのスポーツ医科学の理解啓発をさらに進めていくことも必要。
・国体で良い成績であった競技を成功事例として、情報共有することがとても重要。

競技者や指導者の県内への受入れ

・県外へ出た若い選手がふるさと選手制度を活用して本県選手として出場しているが、就職になると他県を選択し、高知県に帰ってこないケースが多く、選手の強化が継続できない傾向にある。選手の就職先があるかないかは競技力の向上に大きく関わる。
・他県は県立学校にスポーツ推薦枠を設けて有望な選手が入学できる仕組みを設けているところもある。本県でも検討できないか。

関係団体等との連携

・大阪体育大学とのつながりは素晴らしいことであり、そこから生まれる人と人とのつながりから新たなものが生み出されることが期待できる。

女性のスポーツ参加

・大会の試合会場で保育サービスを付け、子育て世代を受け入れる場所と人を確保し、子どもも試合会場に行きたいと思える環境づくりをしている例もある。
・ケーススターディー的に親が大会に参加している間、あるいは練習の間、子どもの勉強を大学生がみるということも考えられる。

部活動の地域移行

・昔と違い、地方の子どもより都会の子どもの方が体力が高くなっている。特に中山間地域等で暮らす子どもは、運動の機会が少なくなっている傾向にある。こうした状況の中で、部活動の地域移行を発端とした子どものスポーツの環境整備を考えていくことは意義がある。

障害者スポーツ

・障害者スポーツを支援する体制については、既存のスポーツ団体の中にパラスポーツ担当部門をつくることが重要。
・多くの方の目に触れるところで障害者スポーツの魅力を伝えることが重要。

子どもの体力・運動能力

・子どもの運動能力の向上という意味で、放課後児童クラブにスポーツの団体が入っていく支援があればよいと思う。

安心・安全の確保

・安心・安全の確保という観点から、例えば、土のグラウンドを芝生化するなどの環境づくりは重要。

スポーツの効果

・スポーツのイベントは、商店街など多くの方が見られるところでやったほうが多様な効果がある。そうしたイベントの開催への支援もあるとよい。